

# 東邦大学学術リポジトリ



## OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	編集室からのお知らせ
別タイトル	NEWS FROM EDITORIAL OFFICE OF IGAKUKAI
公開者	東邦大学医学会
発行日	2017.6
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 64(2). p.156 157.
資料種別	その他
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD71236870">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD71236870</a>

## 編集委員長交代のご挨拶

杉山 篤

東邦大学医学部薬理学講座教授

2014年4月から「東邦医学会雑誌」編集委員長を務めさせていただきましたが、2017年4月より伊豫田新編集委員長にバトンタッチいたしました。この間編集業務を分担していただいた編集委員の各先生（石井、伊豫田、三上、島田、周郷、高橋、津熊、瓜田 敬称略）、東邦大学医学会運営委員の諸先生、東邦大学医学部内外の「東邦医学会雑誌」関係者の方々、そして何よりも「東邦医学会雑誌」をご愛読いただきました皆様にまずもって心より御礼申し上げます。

3年前に行われた前編集委員長の並木先生からの業務の引き継ぎの際に特に依頼を頂いたのは、投稿論文数の減少に対する抜本的な対策でした。その時点における過去3年間の投稿論文数は、2011年25件（原著18、症例6、総説1）、2012年13件（原著12、症例1）、2013年12件（原著9、症例2、短報1）と非常に厳しいものでした。そこで私は東邦医学会雑誌をどのように改革すれば、この課題を克服できるかを検討しました。そして、その対応策として、和英論文が混交する状況から、本誌を英文専門誌と和文誌の2つに分け、それぞれの内容を充実させることから始めました。そして5年以内にimpact factor (IF) を獲得できるジャーナルになることを目指しました。

どうすれば、IFが付与されるような雑誌になるのか、については、杏林舎の皆様（片山、小野里、腰原、岡田 敬称略）に懇切丁寧なご支援をいただきました。しかし、東邦大学医学会雑誌英文誌創刊にあたり解決すべき課題は満載でした。まずは英文雑誌名です。大学名を入れるべきかどうかなど各方面の専門家のご意見も参考に検討した結果、Toho Journal of Medicine (Toho J Med) に決まりました。次は投稿規定です。東邦医学会雑誌の和文投稿規定は近年のIT環境の進歩に対応していない記載を含んでいたため、全面的に新しい内容を英文で準備しました。当初は単独創

刊を考えましたが、英文論文の投稿が1編であれば別刷り状態、万一ゼロの場合は投稿規定だけという由々しき事態が容易に想定されたため、和文英文合本方式でしかも季刊化（年間4回発行）して、2015年に1巻1号を発行しました。連動して英文広告の募集も開始しました。その後の掲載論文数の増加に後押しされ2016年の2巻1号からは英文誌と和文誌の単独独立発行を開始することができました。投稿論文数は、2014年16件（英文10、和文6）（原著9、症例4、資料2、総説1）、2015年22件（英文17、和文5）（原著9、症例9、資料4）、2016年37件（英文23、和文14）（原著20、症例10、資料4、総説2、報告1）と年々増加しています。

一方、投稿論文数の増加に柔軟に対応できるように、事務手続きを迅速に進めるための改革を行いました。事務連絡の電子化、査読者の選考に際しての編集委員による合議制の導入、メール24時間以内返信の徹底、著者からの査読者推薦の受付、学位論文の査読の標準化、論文適正化委員会による事前チェックの必須化、COI申告書の整備、CPC記録集編集手順の見直し、都内3大学間（日本医科大学、東京女子医科大学、東邦大学）における相互査読協力システムの立ち上げなどが挙げられます。一方、目標に掲げたにもかかわらず導入できなかった事案としては、セクションエディター制度の導入、学会参加記・留学記の原稿依頼法の標準化、ベスト査読者賞の導入があります。今後の課題です。

伊豫田新編集委員長のもと、新たな体制で「東邦医学会雑誌」が今後ますます発展することを心から期待しております。今まで「東邦医学会雑誌」を支えてこられた方々、特に東邦大学医学会事務局の高口さんの献身的なご尽力に心から感謝いたします。

## 東邦医学会雑誌 編集委員長就任のご挨拶

伊豫田 明

東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野 (大森) 教授

2017年4月より、杉山 篤先生の後任として東邦医学会雑誌 編集委員長を拝命いたしました。今年で64巻となる伝統ある東邦医学会雑誌の編集委員長を担当させていただくことは大変光栄であるとともに、その任の重さに耐えられるか心配の方が大きいのが現状です。

杉山先生の任期中には、東邦医学会雑誌を英文論文と邦文誌を分けて、Toho Journal of Medicine を創刊し、東邦医学会雑誌を年6号から4号とする大改革を行われました。英文誌はすでに38編の論文を掲載しており、また最近では学位論文も多く投稿されています。一方、邦文誌は東邦医学会例会・総会抄録、症例報告、大森病院CPC、そして学会参加記、教室紹介、論評などの連載記事を掲載しており、自分の専門外の内容でも新しい発見があり、また会員の皆様に読みやすい内容にするなどいろいろ工夫されることで英文誌と邦文誌で良い住み分けのなされた雑誌体系が構築されました。英文論文、邦文論文および邦文連載記事については東邦大学学術リポジトリにおいて、誰でもPDFで閲覧できる状況となっており、本学内のみならず学外へ多くのエビデンスを発信できる雑誌となっています。

杉山先生によってToho Journal of Medicine 創刊時には、すでにimpact factor (IF) 獲得まで念頭に置いて取り組まれていらしたことから、私の今後3年間で行うべきことは、IF 獲得に向けてのPubMed 掲載を目指すことであろうと考えています。乗り越えなければならないであろういろいろな高いハードルに備えて、また雑誌の充実を図るために、今回、編集委員の先生方を早速増員していただきました。編集委員として(アルファベット順)基礎系から赤羽悟美先生(生理学講座統合生理学分野)、石井良和先生

(微生物・感染症学講座)、近藤元就先生(免疫学講座)、三上哲夫先生(病理学講座)、中野裕康先生(生化学講座)、佐藤二美先生(解剖学講座生体構造学分野)、臨床系から弘世貴久先生(内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野(大森))、池田隆徳先生(内科学講座循環器内科学分野(大森))、片桐由起子先生(産科婦人科学講座(大森))、水野雅文先生(精神神経医学講座(大森))、島田英昭先生(外科学講座一般・消化器外科学分野(大森))、和田弘太先生(耳鼻咽喉科学講座(大森))、さらに編集顧問として杉山篤先生(前編集委員長、薬理学講座)、津熊久幸先生(医学情報学)にご就任いただきました。石井良和先生、三上哲夫先生、島田英昭先生には昨期に引き続きお願いし、昨期まで務められた杉山 篤先生、津熊久幸先生には編集顧問として大所高所からご意見を頂きたいと思っております。編集委員の先生方にはご多忙の中、多大なご苦勞をおかけすることになると思いますが、ご協力の程よろしくお願いいたします。

さらに、東邦大学医学会事務局の高口さんが退職されます。長年、東邦医学会雑誌の編集全般を担い、さらにToho Journal of Medicine の創刊に大変ご尽力頂いたことに感謝したいと思います。

したがって6月より新しい体制となりますが、多くの方に支えて頂きながら、この3年間を乗り切れるよう努力したいと思います。まずはPubMed 掲載に向けて準備をし、将来的にIF 獲得のための下地作りをこの3年間でできればと思っています。会員の皆様、ご協力の程、よろしくお願いいたします。